

要点『日本文化原論 永続思想 主体性学』

ご挨拶

1) 主要産出

1-0 表紙と主題

「主題や表紙」は表現の最終的な集約概念と産出を表す。全体を簡潔に纏め根源性を反映した全体を概念と起こし外界へ表す発想や手法が作られる。そこに及ぶ各現象と過程を経て最終的な形の集約を果たし端的に自己の産出性の全体を集約し表す。外界への負荷を与えぬ精神性から良い生の導出を遂げる。産出性への信憑性は過程から裏付けされる。結論的な表現を見れば分かる等という場合、そこだけ見れば済む。「産出に至る過程を見て納得感や理解度、信頼性を得たい」場合は経過へ視線が及ぶ。受ける側の判断と思われる。多様な対象を想定し産出する側は出来る限り負荷を与えず良き栄養と実りを生む配慮が起こる。最良的生という生命観を反映した表現が形成される。人間性が狂うほどに自己認識や産出性への関心が下がり物性力の過度な依存と略奪性が出現する。何を産出性とするのか、見解を整え内包と外側の関係を含む領域観を備え外界との健全な社会性と共存性へ向かう精神性が稼働する。物理依存の激しい体質から言葉や概念の形成と運用が粗雑化する。言葉や概念の執着が弱まる歪性が増す。言葉や概念を重んじ自己を制御し他者との良性を遂げる良い精神と優れた能力を生む人間が作られる。瞬間的な反応が強まり言葉と思考が減退する単細胞と即効性の強まる不健全の潮流に対する警戒と対策が出現する。よい感性と良い動き方の法則を静的概念に固め良い動態を存続させる創造と生態へ向かう。静的質感の高い現象を言葉や概念に引き出し表現に及ばせるか。根源性が根幹を展開し心身と観念の相関と習慣の概念を導出し観測と評価と方法の安定と良質の基調を求め普遍的不変の概念を産む。確かな概念から良性の増産と持続に及ぶ想定が起こる。頭過多と身体性過多に対し根幹的集約の観念を導出し人間の芯の良性と動静の適正な習慣を持つ人間性と生態を実現する。生物物理面の有限性と精神の無限性の因果と現れる。良い精神性を表す姿を言葉や概念に残し現象の変わりづらい良質基調を望む欲求が形に現れる。「子供、未成熟者、ボンボン育ち」の前のめりな欲求過多の精神と身体のバランスの悪さは根源的な不快感を生む健全な精神性が現れ生態の適正化の動力源と働く。物質依存性の激しい精神の病んだ

性格は長らく良好な相関を萎ませる。男女という要素の前段的観点を持ってゼロベースからの適正を作る原理が稼働する。どのような生い立ちや個別性から歪な発想と手法に外れるのか原因は良く分かりませんが、堂々とした精神性と創造法則を求める良好な哲学文化を望む人々が少なくないものと思われます。狭義の哲学文化という領域観を生む。教育芸術及び金融性、政治行政、産業経済という外側の領域を想定し産出性を起こし広義の哲学文化に回る一巡的な世界観を生む。

1-1 動静概念と規則性

1-1-1 動態性

ある提案について、「賛成か反対か」いずれかの選択に狭まれる。創造内容と意思形成を進め、資源の活用に展開し意図と実際へ向けた施策が投じられる。結果の検証を通し意図と手法の適正の評価に及ばせ、反省と発見や改良へ及ぼせる過程と持続が重ねられる。

1-1-2 静態性

こうした習慣や活動法則の中で、個別的技術力の形成と共通的な基準の導出と特定領域観なる対象と反復性の構造の認識へ及ぶ。更に人間や生態の根源や根幹という深みを有する問いと見解へ進み基礎基盤的全体を統制する普遍的不変の基準の導出と稼働という次元へ向上する。

1-1-3 基準概念

個別現象：固有的技術形成、衣食住、ルールや法規や制度の形成、言葉や概念の形成、等。

共通基準：意思形成と稼働、機能管理、資源管理、収支、資産負債管理、

意思形成と執行と検証と改善の仕組み、起案と協議と承認、執行と検証と報告及び改善、

機能管理（設計開発・製造施工・物流・流通広告、金融情報）、資源管理(人物金)、応用的

概念：産業経済と政治行政と教育芸術及び金融

特定観の形成：社会性（家族、事業体、地域社会、国家、国際社会、等）

自然観（気候・地形、動植物、等）

普遍的不変性（根源且つ根幹及び全体性）

根源根幹性：精神性と身体性と観念性と習慣、全体性：生態観(生命観と人間観、自然観と社会観)、

1-1-4 動静概念と規則性 静的動的、動静、

1-2 創造力の基礎付けとなる原理

根源且つ根幹の原理

1-2 -1 根本性

静的 動静 動態		生滅不可分性
	自存性 他存性	最良的生の導出
静的 動静 動的		根源性 (精神、感性、生命観)
	根幹性 (精神と身体と観念)	産出性 (部分性と全体性)

1-3 対象性に相応する表現の示し方

1-3-1 具象的概念、1-3-2 準抽象的概念、1-3-3 抽象的概念、

1-3-1 具象性

静的 動静 動的	生態観		
	動的 (観念と身体と精神の相関と習慣) 静的 (人間性・創造・自然観・社会観)		
	習慣	産出	部分と全体
		根幹	精神と身体と観念
		根源	精神・感性・生命観 (自存と他存)
経過 現況 未来	概念設計、 概念精査、 観測、評価、予測、 課題、方針、施策	具象的方法の考案 投入・実施 検証・実証性 改善、持続性	

1-3-2 準抽象性

動静 動的	静的	普遍的不変性 狭義の哲学文化
	一般性、特定性 同一性、共通性 個別性、	教育研究、金融性 政治行政 産業経済

1-3-2 抽象性

動静 動的	静的	国民主権、民主主義、人権の尊重 平和主義
	三権分立と統合	立憲主義、法による統治、 表現の自由、権利義務

1-4 日本文化原論 永続思想 真なる調和への道 七色の虹の架け橋 主体性学

人間と生態の健全と永続の抽象理念と動静概念と規則性といった具象の様式と、心身と観念の相関の適正という根源性に基礎づけられる概念体系となり、健全な人間と生態の有機的な形と稼働に反映する実際を生む普遍的不変の思想体系が作られる。各種経過や現況性という個別歴史性を含め評価性や予測性を引き出し、相互補完や相乗に向かう精神が増し理念と稼働の循環が存続する。根源且つ全体性に良い基調を生む。『日本文化原論 永続思想 真なる調和への道 七色の虹の架け橋 主体性学』と題し集約される

2)道徳心

2-1 短期中期長期性

物質的な因果と効用性への意識や感覚が強まるほどに、言葉や概念など、無意味であり何ら実態的な効用が出現しない等という感覚が進む。衣食住等という実態的な皮膚感覚に到達する生産性に在って、有用な生産者であり対価を支払うに値する等と解される。音楽や映画、文芸、デザイン性等という領域には不毛感が進む人間の需要面の姿が作られる。言葉という定性的な産物から数値に測定できることに及ばぬと、実態が掴み切れず、なんだか意味不明であり有用性が出現しない。等。こうした人間についてどのような評価性の心象が起こるか。

「ごく自然であり尤もだ。いや、あまりに直接の感覚に偏った体質は不健全だ」等。人間性に対する見解が分かれる。この人間性の根源的な性格に対する求め方があらゆる現象の起源的な因果となって二次三次の発想や基準の導出、作為の在り方に連鎖する。時々の人口や資源の状況から各種需給関係が作られる。需要不足で供給過多等という状況が進むほどに生産の大規模化によって安価な製品サービスを作り市場での優位性を遂げ、競争に勝ち残り自存を求める基調が広がる。この環境下では感覚性の因果が高まり言葉や概念、世界観や思想等という産出性には意味を成さない等という因果性が強まる。直接的な皮膚感覚の効用の強い生産性に価値観が高まる。短期的な利益概念と中身の形成が作られる。しかしこの感覚の強まりから感性や精神性がどこか歪みを招き物質依存性の強まりと過敏な利害性による人間性を出現させる事への問題意識が起こり中期的な需給構造上の適正へ視線が及んで規模の合理性に対する適当な制約性を求める等という発想が進む。長期的な観点としての心身性の相関と習慣から形成される人間の根本的な性質等という観点が現れ中期性や短期性の観点と因果について直接的な効用感に留まらず多要素性の観点が出現し人間自体の需要面の再考と供給の適正を求める等という発想と思考と作為へ回る。

短期的効用：物質的因果性、

中期的構造：需要と供給、規模の合理性、人間の無機質化、画一性、

長期的性質：資源や人口の状況と変化、人間性の適正、

2-2 習慣と蓄積及び概念や理論の産出性

個々の体験と蓄積から正負の因果と最良性の問いと思慮と改善の思考と習慣が持続し上述のような観点の出現と最良的生を探し求める体系的な見解となって思想や世界観等という多要素と相関の概念や体系に集約した言葉や文脈の纏まりが形成される。言葉の羅列的な出現や領域観という体系性を整える思考や発想が縮み、即効的感覚の因果性に高まる体質と性格が強まる事への問題意識が起こる。物質依存性の強まりと力に依存した発想や手法が高まり、思想や領域観を導出し有用性を求める習慣が減退する人間性と生態系と未来像は如何様な想像に至るか。軍事施策の割合を増し外界の脅威を自ら招くか、外界の脅威への対策といった負の発想と規則性が強まる人間と生態に良い心象は進みづらい。個別施策と施策の全体について、バランス感覚を求め人間性の歪性が強まらぬような発想と創造の枠組みを設け主体性の根源且つ根幹性や基軸性の導出と部分と全体の適当な構図を引き出し、変わりづらい人間と生態の適正像を表し過剰な歪性に陥らぬ基準と制御の操作性へ及ばせる精神と態度にあって、快適感と良好なベクトル感が産まれる。以下のような動静の規則性と中身の形成へ及び、最良的創造力を求める態度が出現する。

静的 動的	狭義の哲学文化、 普遍的不変性 人間と生態の健全と永続、 根源且つ根幹性、及び全体性 精神性と身体性と観念性の相関と習慣性、		
	各種領域観や概念の精査、 人間、社会、自然 資源、人口、供給と需要、均衡と持続、 時々の観測と評価予測性、 課題と方針、施策の優先序列性、 適正策の選択肢、		
政治行政、	時々の同一的意思形成 一定空間としての在り方、 自由主義傾向・社会主義傾向、		
産業経済	個別政策と政策の全体		
	マイナス性	定常的	プラス性
	医療、年金、介護 消防警察、 自衛隊、	衣食住、 資源エネルギー、 建設国土 教育、	家電、自動車、 旅行、娯楽 映画、音楽、文芸、

2-3 普遍的概念と運用

これらが思想や領域観等となり、人間と生態の適正を鑑みある程度纏まりを持つ要素と因果の集約的な体系図を起こし、対象性と観測性と評価予測を浮かべ、最良的方法の導出に連ねる法則性が産まれる。「家計や事業体、地域社会や国家、国際社会、人間と創造と自然と社会と生態系」といった各種対象範囲に同一的な根幹性の観点が抽出され主体性と生態の一般原理等という普遍的不変の観点の導出と稼働に及ぶ。

2-4 哲学倫理道德領域

「哲学や倫理、道德」等という人間の根源的な精神の良好性を問い求める研究分野において人間の根源や根幹性を問いながら発想と思考と行為の出現として自己と外界を含む創造観念の導出へ及び、精神性が外形的な姿になり哲学倫理や道德性の質実が出現する。内面性が外形性に起こり言葉や概念、領域観や世界観、思想等という産出性（部分と全体）に及ぶ。概念の導出や整備を進め観測と評価と予測と方法と検証と改善の持続する習慣を内蔵する人間像と生態像となり内面が外形を出現させる。これらが広い意味の「道德」の中身と解釈される。現在の社会状況はどうあるか、悪しき状態の認識に及べば道德が健全に出現していないと解される。教育や道德の有用な働きに及ばず悪しき状況を招いている。座学的な科目による道德教育に対し実社会に対面し道德がどのような外形を見せているのか。道德科目の検証に回る。良い成果を遂げているのか、未だ不十分か、問題が多いか。結果の認識と反省と分析と改善の熱意が続き、良き道德科目を構成し検証と改善の習慣とシステムに及び道德領域の特定の個性の認識へ及ぶ。社会にとって有用な領域と存続するかどうか、広く社会に対面し自己の直接的な技術力がどのように成果を生んでいるのか、検証と改善の持続から領域への真価が算定される。ごく狭い範囲の周期に留まらず、実社会を含む内包と外側の構図をもって道德心の実態が出現し道德領域の範囲が形成される。精神性の質実が出現する。「道德、哲学、倫理」という概念は同類的な解釈に及ぶ。

3)哲学文化観

3-1 特定現象

「道德の教科化を遂げた。」等という教育行政や政治に関わる人からの発言が見られる。一つの成果と解される。何を産出性とするか、創造者による産出規定と実現性を図り一定の業績を算定する観点が出現する。

3-2 分析と評価性の観点と提起

特定専門領域における基準尺度に対し人間一般なる根源性の観点を導出し、生産や活動の基礎土台的な基準を起し特定分野に対する分母的な基礎を提供し人間や生態の完結的な周期と一巡する創造観をもって、部分性の現象に根源且つ根幹及び全体性の観点から特定性の算定へ及ばせる哲学文化という領域の特徴が産まれる。精神と身体と観念の有機的一巡の周期と習慣の持続する人間像を根源的土台観と引き出し何処の領域にも共通する生産や創造の根本原理が現れる。この形を普遍的不変の観念と定め人間一般なる適正像を不動に基礎土台が構成される。

3-3 頭と体と精神の相関

「何を」という特定主題を限定し、例えば「道德の教科化」等という特定領域における目的を絞り言葉や概念や領域観や体系観を導出する頭腦的な作業と産出の規定が精査される。言葉や概念の導出と普及促進を図り人間と生態の良質を求める感性や精神が投じられる。頭腦的産出性の良し悪しから人々との共感や納得が高まり各種現象を導出するに際し、それを反映した個別現象の形成に至ると道德概念と中身が身体性の因果に現れ頭腦と身体の有機性に及び根本的な精神性の出現を見る。基礎土台性の概念を挿入し頭腦的工程について部分性の認識を持ち全体性に連ね一巡的完結性の原理と稼働の周期と持続に及ばせる発想へ展開される。「言葉や概念、身体性の活動、精神性の出現」「言葉や概念の導出、納得共感、発想の同一性、二次三次的言葉や概念の形成に反映、身体性の現象の形成、精神性の出現、習慣と持続、人間性の内蔵浸透」等。

3-4 検証性・実証性

根本尺度や根幹尺度の適正において、部分と全体の認識に適正が現れる。基礎土台観念が弱まると部分と全体の構図や配置に歪性が進み、特定領域における産出の過大や過小評価が出現する。自領域の直接的な産出性に対しそれを受ける外側の対象を想定し産出性がどのように外界に広がり意図する結果を得ているかの検証工程を含めた創造原理に展開し自己の産出性に対する客観評価に届き検証と発見と改善の持続する特定領域の健全な精神と生を導出する人間性の認識が作られる。根本的な人間像の見解が基礎土台を生み基準尺度の納得や共感が広がり特定領域の分母的な尺度と浸透し特定産出に対する適当な尺度と評価を促進させる哲学文化尺度の形成と提起と稼働と検証と改善を遂げる特定領域が作られる。

3-5 動静概念と規則性

これを精査した概念として「動静概念と規則性」という枠組みと中身の形成と配置と相関と持続の主体性原理や主体性像の産出へ至る。

3-5-1 動静概念と根源的観点

静的 動的	生滅不可分性
	動静 最良的生の導出と持続性、
特定性 A,B,C	

静的 動的	健全な精神性を表す概念
	動静 精神と身体と観念の有機性と持続性
身体的因果性 精神的因果性	

静的 動的	根源且つ根幹、 産出性(部分と全体)及び習慣
	動静 方法の考案、方法の稼働、意図と結果の検証、 反省と発見と改善、習慣と規則性
概念形成 観測性、 評価性、未来予測性	

静的 / 動的	国民主権、民主主義、人権の尊重、平和主義
三権分立と統合	動静 立憲主義、法による統治、表現の自由、権利義務の均衡、

静的 / 動的	理念
対象の経過と現況、 評価性、予測性	動静 方法と検証と改善

静的 / 動的	あるべき：哲学文化
ある：科学性	動静 する：技術性

3-5-2 動静概念と具象的展開性

静的 / 動的	狭義の哲学文化 根源且つ根幹及び全体性
特定性 ・対象や領域選定 ・経過現況 ・評価予測	動静 方法の導出と検証と改善
	教育芸術及び金融性： ・概念精査と稼働性：頭脳的定性概念と定量性・政治行政
	政治行政 ・同一的意思形成と稼働と検証と改善と持続
	産業経済 ・個別的思索と施策の全体

3-6 基礎と専門

基礎の弱まった特定領域に陥らぬ土台的基準と稼働の観点が形成される。哲学文化の健全性と盤石性に不動性を図り健全な生態と永続軌道と循環の持続へ及ぶ。あらゆる科目や領域、

創造の前段性の観点を組み土台と特定性の適正な相関を遂げる。基礎が狂うとその上に適正な特定性は起こりづらい。物質的な因果と社会生活の基調が習慣化し身体性に偏った感覚が常態し感性や精神の因果が弱まり心身のアンバランスな相関に外れた人間性による言葉や概念の形成と導出に及び言葉や概念が羅列的分断を招き生命観や精神性の伝わる産出性に届かぬ様相が出現する。内面性が外形となり自己の性格が表面化し自己自体を知る。

3-7 頭脳過多と身体過多

頭と体と精神の有機的習慣と持続の末に良好な言葉や概念が産出される。「生態概念」を問い心身と観念の相関に対する健全性を模索し基礎土台性の見解と定まり、基礎と専門と全体の静的概念体系を持ち対象の選定や観測、評価予測と方法の導出と検証と改善を習慣にする人間が作られる。感覚過多と観念過多という両極を視野に備え感覚と感性と観念の適正な割合と相関の習慣を有する人間性を基準や基軸に起こし過不足と制御の規則性や操作性を遂げる。

3-8 個性と完全性

各種個性が形成される。個性という認識が起こるには完全性の形が備わり過不足の観測から特徴を掴み個性なる概念と適用に及ぶ。完全性の概念を意識的か無意識に内蔵し特定観を引き出し観測と評価の分類を生む。個性をよく生かすには完全性の概念を少なからず想定し「分化と統合」や「個別と共通と普遍」の持続的な習慣に及ばせる発想が作られる。

3-9 自存性と他存性

相対的な対立が強まり自存に偏り他存が弱まる社会性が進む傾向について自他を含む変わりづらい完全性の概念を少なからず内蔵し特定への認識と相互相乗へ向けた精神が出現し変らぬ健全な人間と生態を実現する。

3-10 根源性と抽象と準抽象と具象

「哲学や倫理や道徳」等という抽象性の高まる概念は多様な解釈が広がる。人間の変わりづらい「精神と身体と観念の相関と持続の適正」という観点を起こし自己と外界の良好な在り方を問い作る等という言葉に置き換え具象的实际を生む価値観と稼働の主体性と人間や領域化を実現する。頭と体と精神の相関を得て質実の実感性を生み精神性が培われる。習慣と

持続から精神の実態が作られる。

動的 抽象、準抽象、具象	静的	根源性 生滅不可分
		動静 最良的生

3-11 静的体系と動態性

根源且つ根幹の観点が萎んだ抽象概念に偏るとどこか歪な産出性に嵌り外界に良い心象や因果が進まない。持続的な生と需給の弱まる表現や創造に留まる。精神性や感性が外形性となって自他の因果を生む。「あらゆる物事に生命が宿る」といった言葉の本意が現れる。作り手と受け手の相互の感覚や感性から現象の認識や評価に及ぶ。「局所現象と構造性と性質の観点と相関」という静的体系観と「過去と現在と未来」動態性を含め動静概念と規則性の算式を構成し人間と生態の健全と永続軌道が進む。

動的 動態性 過去と現在と未来	静的	静的体系 局所現象と構造性と性質の観点と相関
		動静 最良的生の導出、 人間と生態の健全と永続の軌道